

俳諧續朗詠集天





續朗詠集目錄

夜話亭撰

更衣

橫野右

同

真伯乘

卯花

藤化光

卯花

柘路十

同

清龜水

同

川為妻

郭公

尾曾文

同

藤他朗

同

僧一泉

牡丹

中子禮

同

黒十類

同

丹松羽

牡若

神都有雪

同

澤克巳

同

大里考

凌繩

認奇

扇

鈴去角

同

泉茶平



扇 罔布全團 永百府 芥子 真序州

灌佛 杉隣兔 若葉 原仙魯 蚊 田芦三

蚊帳 夜寒堂 蚊遣 鏡裏團 晒操 廣有耕

諫鼓鳥 黑十蕨 花橋 波梅裡 螢 杉交甫

螢 藤才羅 鶉飼 井兔狂 端午 杉其雲

端午 戶樂和 蟬 高竹摩 同 今銀史

小角豆 藤他朗 茗竹 蓮阿坊 萍 石兒童

冰室 藤巴人 納涼 大三枝 同 野竹支

納涼月 訖齊 抱簞 僧不才 同 高土米

抱籠 僧花谷 蓮 松龜一 同 友作 焦尾

掠蓮曲 蓮阿坊 日傘 藤紀六 凌霄 野飛仙

餘真 題混雜

挑節 廬元坊 唐扇贊 及喬舍 鮎 丹委羽

訪茶人 廣有耕 澆笠 其節坊 鷺 僧花谷

煙艸 川馬交 蝙蝠 杉巨扇 拾柶奄題花 野三壺

蛸 藤杜來 菊 僧花谷 題隱者 杜十



牡丹餅 神都 有雪 寄柱物戀 尾曾文 雪柳 久作 枝音

残花 前草流 同 桃主仙 白藏主画賛 蓮阿

送歸東内人 蓮阿 戲賀雜髮 佛狂子 杏 及喬舎

詠奈良團 田佐兆 瓢賛 夜話亭 詠四季竹 園胤京

蛸 野飛仙 窓螢 方三軒連 松蟬 同 白志

軒蓬 同 胤白

更衣

横野有

花は小神の侍をまじりて 山とみやうれは 袷着るは  
衣をひきく写すふりて 帽子の縁は 時をよかへ

全

奥伯葉

あはれ言吹乃ちむつらぬは さらさらと鳴りく山くれ色  
あまふけりとまよふと入 衣更きぬ神の軽さよ

提とのく腰よりこゝろや衣うへ 木兒

花の香は酔さめさし 衣帯 蓮阿



笠履忌針を世活し衣久 其麦

神を川次と書しあうもか 普東

綿貫や銀聖と書れ電ちきれ 白兔

従ふ多き流もあき 後之卯 三列矢作 麦南

卯の巻れ襟ま川白く衣更 其石 大木

花れ香と衣柳うまし衣久え 香尾 榎須賀

松竹も古葉脱くや流もか 仙病 女良 三六歌

伊達乃名と書く也序是也衣久え 可卜

花れ香乃名脱く竹も衣久え 蕉冲 三六平及

言はれ肌とれ也美や衣久え 采因 姜濃関

綿貫や色らの書と書れよと 呂琴 同

海老きや衣け山を流し地 仙魯

卯乃美 藤化光

嘆くの巻と垣も居ぬ 書りけりていふあふと

衣久り起り中身の世を 書りていふあふと



うの花

柘路十

依りてつらねば夕暮と

しに卯辰美し宿るる宿も

香れ常のまほれ持る

うの白ゆと香炉のまほ

全

知多成岩

清亀水

還白ゆま卯のむとま

まほて垣下敷いあけと無

夜よまらま思書よ月がめ

月まのらりて啼かまほ

全

川馬麦

くせと雨とほれはけり

静くら書れまほれり

夜あくる移うせし

月れ名よてふけりまほ

卯辰美し書れまほれり

土来

うの動も書えとまほれり

うらハ

亀水

卯辰花やられまほれり

鹿京

う乃毛や本陰れ書まきり

曾文

子規

尾曾文

ほやまほく

月り静あまほ

まほ耳と次平の里

啼く無秋とけり



時多 首尾吟

藤他朗

月も入され山はさき次  
 空のつらりなきおとさ  
 本もかけことねむらう  
 筆と後光れあかりさき  
 蜀れ帝の古いゆきや  
 しもやせふ名さあけら  
 藤く早報ま山平よ一色  
 月も入され山はさき

全

僧一泉

ほやあす啼つら  
 羨もゆさちりれさ  
 千重とまてはやす  
 短歌もかう行那し

古くぬえぬくやゆさす 其麦

舞々那し雪乃つらりり郭云 七年 旭星

風之香とるくゆけりほさます 古雁

仕合も一書ゆのやほやとあれ 鷹麦

洛陽の客舎に

我耳れあまりはしりし時多 松羽  
 侍もせぬさかお位一郭云 但李  
 多雪乃わころ心強き也 杜宇 麻尾



初勢と山物と云ふははやくも 化口

山家と初勢と云ふははやくも 白免

初勢と山物と云ふははやくも 不節

是れ月れまゝ是れけり 杜宇 之は桐尾 岷竹

一声と云ふ音と云ふははやくも 同 久保 麦南

月かゝ初勢と云ふははやくも 石府 之は西尾

音限と耳洗いと云ふははやくも 麦伍 世は久保

短物と待身と云ふははやくも 時鳥 神尾村 示申

眠る月も心上の音もほろもまゝ 如多西口 路荊

虫と吟と云ふははやくも 同大野 白河

華隈と月と云ふははやくも 成岩 克己

音と云ふははやくも 津崎 世阿弥

一丁と云ふははやくも 長谷金戸 楓志

三と云ふははやくも 長谷金戸 松軒

花乃後山と云ふははやくも 化光

おし啼ぬ葉と云ふははやくも 蜀魂 百枳



牡丹

中子禮

廿日咲く水花を  
猫さくを相子さよ  
紅粉さくを色さう  
唇をうこうせやと

是れ産も富を水花  
柳子をまきく暇からむ  
赤豆つけの形はさふ  
柳をむくいぬいさ

全

黒十数

はる幸是ぶるれれさ  
かの石鶴乃神ようはく

餅いりやき名をゆり  
花れまの云根て名

全

丹松羽

皆も貴妃さきとく  
例めく貪ううゆく  
猫と病くかまわ  
情もあなれい新乃

名取まの名をたり  
玄宗を写ふゆけ  
蝶と羨う相少らむ  
廿日とを水くかき新

富をされ小神さる牡丹の那  
柳子よりまま乃くまほえんれ  
花教く身軽く飾し牡丹ハ

味鏡 三笑

三列名也 枝青



銜費よりまゝのさしつゝ牡丹中津川里笛

出止なく猶も登座れ牡丹知多福住里桃

令れぬれまゝ持のさしほへんれ和推

杜若 神都 有雲

水く我名とまき川をさる され川りのさるさる

流きて沼の泥は深きほど 若田乃池の底も深き

花も葉もまゝとさるる勢 けし師直も花もまゝ

朱とうりつと人の世に あつといふのさし

全 成岩 澤克己

水く流さかくさつと うされも名も

ゆらゆらぬれぬれ かわよ花も名も

全 三列 磔塚 大里考

むくも名何と楊より 名は名も

朱とも奪ふ名れ さし川

楊れ名と五文字 成岩 克己

京深くまけぬ 大野 助房



古橋より七関とすりの地かき川をこ

中は川

楚文

余れ色より月よりみ形

呂園 呂園表佐女

麦秋

諏弁

花ちりて雲にこ架

紅粉美むとけみら

厚さりと早苗をこ

穠り形一麦忠秋

沖野一より紅葉をまきし麦れ秋

蛙急

夏菊より心より形一むき乃秋

大野 奇遊

相杵より鶯少秋より麦の秋

三島柳尾 砥竹

扇

鈴去角

は白いふらかやう

風忍葉りいねかきし

白地より倦とこの地を

あり骨よりまともち

与帝ハ射と信乃茶

班女といくく圍れ肉

去師りよささるのかまめ

まらりきせといひき

全

泉茶平

龍と吟たれ量積の地を

虎とくそむく行のゆし

しらく雲より風とまき

雲をかきむきれおま



全

園布全

去仍く咲く花よき哉 この町にさきと好きうつくしむ

むらけと柳の煙とけり 西湖もよむむは西一山あり

産花くも風を帯りぬ 庭うね

使若れと尾鱗のおまふ 扇うね

園

三列西尾 永百府

草と涼これ庭へまほき 言とて灯す堂に消えて

庭中とよふ柳の甘き合 たむの智恵はあつた丸れ

起より秋とろふ人う 園うね 何力

膳先と饅と貴物 扇うね 精醉 第七橋

芥子

三列西之町 真席巾

畑ととてと籠と持た 舞の蝶のまも野う

世もきき名れに御て 思ひ切とる芥子れ心

去ちと向内と自刺やけ 乃茶 左洲 真列仙堂

風流れきと女と芥子の花 千雀 三列平坂

ちと細工と巻とと れ舞 不卜 神尾村



貫りし多るくちるけり老蒼 味羨 不知

灌佛

隣鬼

と新産却るとはゆへく 生れさうふ唯 我獨り

そ一十佛と取揚しより 庫裡祖母の名代始とる

灌佛や和尚と強志出まると 海宜

庫裡はまると産衣籠せん仏生會 不才

南の蓮乃花を招くは 佛生會 采子

百費にけりさうと 佛生會 立和

茗葉

原仙曾

志望れ却ふ名と有るら むらきれと老よけり

幕うら包す初も荒行 種もにくますと名葉山

は家も志花るる幕と つれ 露狂

苦もなけりあり合ま 二匹桐尾 芦水

とす枝志舞とむくふ 味羨 可船

教も舞れ初とさ 三木田 梅字

海棠志眠りも是く 白鴉



蚊

田舎三

門をけり乃実とすゆれど  
穴をほく事とすくはく  
志はいられ腰に蚊叩  
困る下くむさん  
蚊

蚊帳

夜寒堂

初秋の夜と香し  
吹風志香と香し  
驚きぬ夫婦中  
痛く何ふ蚊屋に波  
つる時とる家も裸に蚊帳が那  
不三  
物も何とて寝る夜も宵ふ余帳式  
近交

梢くこはさく喜し蚊屋乃月 巳人

蚊遣

三列西尾  
鏡裏園

民に竈も煙をらけ  
窓棹れ皮も世ふ捨らと  
冬あはれも蚊にやれ  
鬼の糸へ乃風く退る

遠月もと身より匂く蚊やり  
梅裡  
入船を清くむおや乃蚊をり  
蘭支  
火とくをれ下ると蚊をり  
三列西尾  
裏園  
客僧も煙と匂く蚊やり  
神尾村  
星梅



まぐ人れ先へ迎おす蚊ヤリク郡 智女大野 釜川

伽羅たつと馳を乃詠り蚊きり哉 経史

晒楠 廣有耕

青丹よりさのほろつ詞と 赤良れ里よりあゝ晒が

白く白着れゆるり そ日馬さかぬかばら男

川の瀬もあび形なりゆらゆら楠 去角

ろの人と目より雲三けりささし楠 杜素

鶯の羽と仕舞のさほや 晒干 何力

諫鼓鳥 黒十類

かんこきく おとづく虫山住居

里とあともこも ろの勢志若治ふ

草子木魚やむ時かんこき 馬麦

夕ぐれやゆりささるまみ 篠鼓ささる 居菜

まの穂う時や日言れんこ鳥 カフト 五藤舎

淋されくくぬけやかんこき 之列吉田 麦書

法教多富のねりれ竹乃真 神都 毛柳



かんこき 晴やむく乃 東海屋 曾文

荅橋

波梅裡

羨楊虫 恙々夕部ハ 其也あれは五月周也

さしむく 此際 是ゆく 包ちく 巧す 神此 綿音

幸らん ねれ 言や 葛蒲 柳く 朝つき 子礼

幸ら 花乃 香や 古寺 虫 筑地より 踏十

虫

三暗夫作 杉麦甫

堂ら 文 既 瘧 どうれ 子 筑子 此 籠 ち 停 ぎ ず 是 遠

かのく ち ち 此 神 たり 似 せ 登 点 かん して ち かけ ち 形

全

首尾之吟

藤才羅

堂 葉 屋 ち ち 形 風 ち ち 形 葉 ち 形

招 ち ち ち 形 園 ち ち 形 水 ち 登 ち 形 浮 ち 形

ち ち 形 意 ち 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形

高 此 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形

是 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形

枕 灯 虫 供 ち 形 ち ち 形 ち ち 形 ち ち 形



風は消風舟灯しとほつた 化口

宇流川は宵宮を形とほつた 一免

水はあふれをこころにあらぬ哉 茶檜

入相志強くは毒はを堂へ那 三浦川 桃白

善れあふけく月とぬく堂へ 三ノ大歌 可扇

あて火れぬを夜乃堂へ 林尾村 里梅

お水れとどくを夜乃堂へ 知事大寺 東兵

雪のあふれを夜乃堂へ 美徳園 東奴

薄の雪の夜へ散つてやぶ堂 榊吹

月乃夜もきくはあふ無堂へ那 彦星

風まよふかきまよふ夜を 悟一

鶴飼 井兔狂

笛きくむねに火と 月れおハ涙うま

涼々を中 極楽風 精をひ乃肩体

月はくを帆かきてきね精舟 茶布

月代く本弦とのちね精舟 茶谷



月れゆく罪も消るり 粉を梅

英徳金戸

桃溪

端午

一乳子

其雲

轍了えゆれ里れ子多治 翁よりかこらるる翁も侘つ

月もえ白ふ吹送る日ハ 千も吉申く一月千本

全

三列大野

戸樂和

門も勝りの陰難刀ホ あやせれ花ふ朝も初るき

風もく葉も多る代もれん のちもれはれも初ありけり

山風も却くるとせれ轍う那

鴻巣

柙几

ほぐくやとよもれり也 粽う那

三ノ月

三意

鏡ももみ沢のあちちちあうれ 至盡

行側と男風ゆくのあうらあ 荖谷

葛も酒湯もほむさう乃小池わと 粽二

若草もや麻もよつさく暮こととら 范李

舞糸と歌う名の歌もさうゆ酒 桐子

古馬屋れ門もつさくし 深のちと 右先

馬もさうく風と木給り 織等 梅香



葛蒲ゆづ青や虫根を信れ言 大木 其石

清山人志繁よめてさきちまきうれ 津崎 毛立

町英くまきいこれま治暮こそと 普东

蟬 高竹摩

かの羽衣れむし扇き そ扇と意乃や新指し

松を齡をよ代よ多て 熱蜂のふれけも新し

全 今銀史

蟬乃言れきうれば 梅檀くぞねら

きふの信れ短ふと きふの短ふと

翠乃言れきう扇や 松く蜂の勢 鬼狂

書名色蜂くか き新暑か 紀ふ

蜂れ考熱 きふ事家あ川さうれ 九人

く川蜂也 まききれくれ啼き か人 柳系

富士行の小扇 いも暑し 蜂の声 中津川 十八

夕まれ けくきうけ せき乃勢 蛙意

身内く まけり 出さ也 蟬れ色 布全



竹ノ神志ありと標志志あり耶

十藪

小角豆

藤他朗

花を歎きも詠られぬよ 志まきけの名よろぬらし

蔓よりゆるしれど命も 一の口れ鬼を十八

十のやい一せ扶けくさげくれ 麦司

若竹

蓮阿坊

破弁よりれ翁おとて 風よりあひまそかくや姫を

あり候麻のけりふも けをとりよ若さうりか

風口をぬきいと涼しふり弁 眉華

嵐風よりかりおぬやあき竹 津路 高狂

一そつと挽くましやと幸竹 鶴里

転えれ候やの色あきこと弁 三列桐尾 持垣

若竹志背をうる庵より 藪隣 三ノ木田 季害

風をゆねき雲と拂ふやとひ弁 肥後 乙詔

けり竹やと朝も一ゆりのいより 二ノ平坂 算外

風をう葉を吹出やとひ竹 加賀松任尼 素園



くむすハ其れ初音也こやー并

ツシニ  
本音

浮草

知多成岩  
石見童

世々新水りや洋れ茶。さく波素さそりて日ハ

ゆれうく釣竿の糸。柳しりま家風れ涼さ

廿洋やららハ金取く足せく妻家 十類

うさまや留りも子孫はく鳩の海 ツシニ 度柳

浮草は花もたゞ凡さくらねくら ナラハ 児童

あふもてま く うさまれ舞 本糸

氷室

藤巴人

候と氷れ自をさきて みよりちれ家れ雪汁

りうら海の下園とめて 雪是れ肌のまふ鷺く

八百屋やと浮ふは清き氷室外 他朗

はたささかゆらりみりさわり候 伝溪

鬢れおとよくはとんよりゆ室ち 芭阿

卯の舞れおとまきむり清氷くら 竹節

蟬の音もあつしえわり氷室山 扇橋



納涼

三列之所  
丈三枝

夕ぐすく暑き月夜

湯の舞子も夜を涼しく

全

涼の舞子も夜を涼しく

いさ風と松の節

納涼月

扇は松の節に涼し

海も又涼しく松の節  
起る涼の舞子も夜を涼しく

同  
野竹丈

海も又涼しく松の節

夕ぐすく暑き月夜

詠齋

宵周乃を驚かし

山ぐ移る價りと

あがき帯の半は月

傾城の日は夕ぐすく

矢作

竹丈

涼も遠くは待てず夜は涼

同

麦南

涼も遠くは待てず夜は涼

三列相尾

瀧月

涼も遠くは待てず夜は涼

三列中河川

羽那

涼も遠くは待てず夜は涼

三列古山

芳斗

涼も遠くは待てず夜は涼

三列中徳内

為舟

涼も遠くは待てず夜は涼

僧

双足



抱菴

三五七言

僧不才

困了

抱菴去

真座も那也

宵れ

活外乃

うぬ涼しく

誰々

け着と

蝶也——多

多代と

驚れそ

名も竹丈人

全

高土果

思ふてふ竹丈人

抱く痛うさ名ま川

とれとれ 鶴乃言

花年うすさう次

全

僧花谷

書や痛く病の中

抱く痛くさ名ま川

筆了時春の水も

竹と婦人の浮名ま川

正化寮うさ名ま川

去角

奥手向うさ名ま川

蓮阿

ま思くを物も

字ト

深麻——猫も

不才



蓮

松亀一

つらつら水に花を浮かす

玉にそよぶの蓮は咲く

うき世に水は流るる

花は酒壺乃て是は物

全

三竹矢作  
焦尾

濁りし水は流るる

瓶乃ては酒壺乃て是

浮てかりの袴を脱ぎ

実を脱ぎては是れ物

採蓮曲

蓮阿坊

浮たるる水は流るる

うき世に水は流るる

水は芙蓉の如く流る

西施も砂に花は咲く

あふらむ空をかくる

李青

かろりの座をかくる

紀六

多除ききりしる

矢作  
焦尾

日傘

藤紀六

物に日くらする

ねむるる星の如く

級之花をのぼる

流るる水は流るる

乳母もこれより

甚し



凌霄

野飛仙

あすの夜凌霄花

夢をうたれあす

あすの夜凌霄花

夢の夜夕陽目

凌霄や鬼の名のはく百合より

正仙

夕陽に松を酔えや 凌霄花

和推

春をぬく風ぬくぬせり凌霄花

一泉

凌霄や鳥も口わくまれ乃思り

鈴麻 百家

朝露の湯にこころの凌霄花

夏希香

餘真

題混雜

堯節

唐元坊

三千れ官女も

枕を日乃多き夢

酔多程ふきの媚

醒く恥る月れ眉

赤飯を色くして

胡葱アサツキ乃香ふ志乃

花がごとく抱いづく

男雛をかみけす

角屋す牛もつらちを堯の花

蓮阿



唐扇賛

我朝此かほりも  
数万里と隔りま

轆

まろくもこれより蟹

おもしろみぬより蟹

訪葉人

野路より入るる

及喬舎

まろくこのまろくも  
まろくもこれより蟹

丹松羽

まろくもこれより蟹

まろくもこれより蟹

廣有耕

田舎まろくもこれより蟹

十法花景色

淡筆

ウラメヤ  
沾かしくけう移り筆

葛れ松系風の誘へ

一説より目え

其節坊

ろく月景れ昔思へ

孫の葉もこれより蟹

禁言

僧花谷

谷乃くもこれより蟹

梅の道よりこれより蟹

うくもこれより蟹



烟草

川馬麦

口と弁ける月の輪と吹  
ふれつとく宿れつれく

鼻うこりせと中れおひこら  
うまやまをこれたひかき

蝙蝠

知る大野  
杉巨翁

空を人目とまふ折揚ふ

多ふゆきれくおる入相

世うかひほりとは名はと

さうけうの身うかれ

拾栢菴題花

円城寺  
野三壺

うもは美れまよきさう

多ふ世の川蝶とあふひ川

秋とあはりの口ふまは

己う曇りれ名もまは

蛸

藤杜来

走も美ふと入るあれと

海苔乃衣を身うまは

足まきまこる夜まわ

端うまわり梅葉うら

菊

僧花谷

杖をばくかき如草

面看乃恙志うら

菊をま 貞れ色

うらまを成乙女む

仙人と伝うううぬもまえれ茶

蓮花



題隠者

神都

杜十

世をわかれ花と信じて心む  
身ハ星際之侘と好んく

杉志けられまの事さく  
炭乃折とハ終く如ぬ

牡丹餅

全  
右聖

牡丹ハ富教多し吟こよ  
流く夢夢ま下産多し

小萩れ秋乃あられ如と  
花乃降目も吾れ物如

寄短物

尾曾文

短きハちやうこれ如く

清き石虫神と葉と及

志望もれ傍と心とまぬ

迷ひの程れくゆる思ひや

雲栞

三羽矢作  
技青

多れ夕くれ庵もまのけく  
まれとね家まん生れけり

言乃栞れ身うとまのせ  
折とまの竹のまも美人

隈とりと初とく雪乃栞れ 蓮阿

残巻

我後新写  
前草流

夏うととまらくまの  
あふ来栞れ名あれと

まれハ満るま乃う  
まのうゆく塔葉あ



全

同新

桃主仙

上五七

春復し楊柳あれ  
卯月雨さつりき  
ほくまはと 雪也  
花れ如しよるらん

白尾主画賛

蓮阿坊

あま化さつと思ふ  
尾上尾花の種はうら  
昆布さつ柳のうら  
これより葉も花も

送帰東武入

三五七言

全

今也  
けりよまれ  
あつらんあれ

まり  
ゆよかおれ  
常しやくあれ

いま  
蘇のまよ乃  
ねらまきとて

あま  
ねふらぬよ  
かき帰る

戲賀薙髮

全

掃けつれ日れ世は他  
世と掃梓れさつる  
以てまれの候き掃  
各坊もやあふ房も

十百奇先二れ若かのさつ乃ねあらして主知人志業候を  
ついでて一片の扇風をいこうむせまわらぬ  
よりのうららひくも同文をうられ掃きや那り



反喬舎

尾上より望むる景色一色  
いづくも乃を忘れぬ  
ちきりぬ公志多代為代も  
祝の海に流るる川も

詠奈良良團

田佐兆

奈良良團のまゆりく  
橘の香の神もゆれは  
之益也讀し月れくまの  
も移く園も風も葉も

行くもくハ木葉をゆく園の那 蓮阿

瓢ノ賛 万葉歌

夜話亭

むしハ花を歌ふ續し之霜  
今ハま実れ怪からん場  
つりて許中よき有り友  
総押へる月もきく人花

詠四季竹一

岡胤京

竹の君れなすれもたふ  
ゆれぬきも中ゆくまじ  
も色も一色 陰も世りく  
笛乃一歌れ書も寄らし

題 鮎

野飛仙

入るれ名をうりす  
揚貴乃名也うり



たゆくは江波世々く

佛少と箱法師

窓螢

知多半田

志水

げよるの戸れは居あて

高き螢乃照らすききれ

故人と友ふみと讀よと

彼清人負をそひてうせり

蓬物く軒やほくは所たのき

全

去蟬

同

白志

見洲一松も高く啼蟬

若葉もよまふ福れ異き日

その法声乃は心し不響く

き盤木もしく古葉もせり

「志きり風うく名様の声

全

軒蓬

同

鼠白

名らく草とせころのし

軒をさくし無き酒ありと

後も交れ切目きどて

けし長生れあふぬとよ

そりても麻とぬと無く草とれ

全

春真朗詠集之賀

東濃

匡山海宜

春も一十月鳥り居て

いふ無風れ色ゆきふく

倭乃きの草ものい

春乃花といけふ



むくれ書乃故きと温心  
今言終志新きを志れ  
かの祝蓋れ聲をうけし  
ふらぬ玉の月あけし後

四季之吟五章

同久里

猪志耳ころらぬや廿命花  
士錦

同土岐

永土田れ仕事出まより孫乃宗  
百童

吹通す身まてまぐし下地窓  
全

破れ言聲も衣ほゆるりくす  
全

牛乃角栲甲くし物も突りけり  
全

閑友舎二季





